

教 育 研 究 業 績

2019年5月1日

氏名 新井 邦二郎

学位: 教育学博士

研 究 分 野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド	
心理学	発達心理学、教育心理学、臨床心理学、カウンセリング心理学	
主要担当授業科目		
教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項		
事 項	年 月 日	概 要
1 教育方法の実践例		
① 埼玉大学教育学部	昭和51年4月～ 平成元年3月	「幼児心理学」「教育心理学」等を担当
② 筑波大学人間学類	平成元年4月～ 平成22年3月	「発達心理学」「教育心理学」等を担当
③ 筑波大学心理学研究科博士課程 (5年一貫制)	平成2年4月～ 平成13年3月	「発達心理学」「児童心理学」等を担当
④ 筑波大学人間総合科学研究科博士課程 (5年一貫制)	平成13年4月～ 平成22年3月	「発達心理学」「発達臨床心理学」「発達臨床の実際」「臨床心理査定演習」「ヒューマン・ケア科学基礎論」等を担当
⑤ 東京成徳大学応用心理学部	平成22年4月～ 平成29年3月	「発達臨床心理学」「教育心理学」「生涯発達心理学演習」等を担当
⑥東京成徳大学心理学研究科	平成22年4月～ 平成29年3月	修士課程「発達心理学特論、発達臨床心理学特論、発達心理学演習」を担当。博士後期課程「発達臨床心理学研究、発達臨床心理学演習」等を担当
	平成29年4月～	修士課程「発達心理学演習」を担当。博士後期課程「発達臨床心理学研究、発達臨床心理学演習」を担当
2 作成した教科書・教材		
①図説発達心理学(共著)	昭和52年5月	児童期の発達について、体と運動の発達、認知の発達、児童と学習、対人関係の発達、児童文化、児童期における適応について図説した。

②図で読む心理学・学習（編著者）	平成3年5月	幼児・児童・青年期における学習を理解するために、学習理論から、教授・学習、教育評価、障害児の学習など、幅広い内容を扱い、なるべく図や表をもって説明を行った。
③事例発達臨床心理学事典（編著者）	平成6年4月	乳児期から青年期までの子どもの心の問題を基礎と事例とに分けて、解説した。主たる編者として関与した。執筆項目は、「発達臨床心理学」「気質」「アタッチメント」「第一反抗期」「自己決定感」「発達課題」。
④図でわかる発達心理学（編著者）	平成9年4月	最近の子どもの発達の諸問題と関連させ、現代社会における乳幼児・児童・青年の発達について、各年齢段階における発達課題や発達の遅れやゆがみの問題、特に成長後のさまざまな問題と結びつく自己コントロールの形成の問題を取り上げ、論じた。
⑤図でわかる学習と発達の心理学（編著者）	平成12年1月	幼児・児童・青年期の子どもの学習や発達の問題について、特に学校で教師が学習指導や生徒指導、カウンセリングなどを行うときに必要となるような知識や考え方を中心に論じた。
⑥教育心理学（編者）	平成14年11月	幼児・児童・生徒の発達や学習、障害児・生徒の発達と学習、問題を持つ児童・生徒への臨床心理学的なアプローチなどを取り上げ、解説を行った。主に編者として関与した。
⑦教育カウンセラー標準テキスト（初級編）	平成16年5月	教育カウンセリングの視点に立って乳児期から青年期までの発達の課題と各発達段階での危機について論じた。
⑧教育心理学—学校での子どもの成長をめざして（共著）	平成21年1月	教育心理学の学問の成立過程やその発展の軌跡を辿りながら、子どもの発達と教育との関係のあり方や学校での子どもの心理的な問題への対応のあり方、さらに教育評価のあり方について論じた。
⑨教職論（監修）	平成22年5月	教員免許に必要な教職科目のうち「教職の意義等に関する科目」に対応したテキストを監修した。
⑩道徳教育論（監修）	平成22年7月	教員免許に必要な教職科目のうち「道徳の指導法」に対応したテキストを監修した。
⑪教育内容・方法（監修）	平成22年7月	教員免許に必要な教職科目のうち「教育課程及び指導法に関する科目」における「教育課程の意義及び編成の方法、教育の方法及び技術（情報機器及び教材の活用を含む）」に対応したテキストを監修した。
⑫教育基礎学（監修）	平成23年10月	教員免許に必要な教職科目のうち「教育の基礎理論に関する科目」に対応したテキストを監修した。
⑬進路指導（監修・編集）	平成24年5月	教員免許に必要な教職科目のうち「教育課程及び指導法に関する科目」に含まれる「進路指導」に対応したテキストを監修し

<p>⑭特別活動（監修）</p> <p>⑮新版教育カウンセラー標準テキスト（初級編）（共著）（編集協力）</p> <p>⑯新版教育カウンセラー標準テキスト（中級編）（共著）</p>	<p>平成24年7月</p> <p>平成25年8月</p> <p>平成26年4月</p>	<p>た。</p> <p>教員免許に必要な教職科目のうち「教育課程及び指導法に関する科目」に含まれる「特別活動の指導法」に対応したテキストを監修した。</p> <p>教育カウンセリングのための発達理論を気質から始まり、青年期の同一性に確立に至るまで、どのような過程と段階を経ていくのかについて論じた。</p> <p>教育カウンセリングのための生涯発達理論を、社会化と個性化の視点から誕生から死に至るまでの生涯にわたり、どのような過程と段階を経ていくのかについて論じた。</p>
<p>3 当該教員の教育上の実績に関する大学等の評価</p> <p>① 東京成徳大学応用心理学部臨床心理学科「発達臨床心理学」の授業評価</p> <p>② 東京成徳大学心理学研究科修士課程「発達臨床心理学」の授業評価</p>	<p>平成27年度</p> <p>平成27年度</p>	<p>東京成徳大学学部生対象の「発達臨床心理学」の学生による授業評価の結果である（いずれも5点満点）。(1)出席状況3.8、(2)シラバスを理解している2.7、(3)よくノートを取る3.5、(4)時間外にも授業内容を学習2.7、(5)授業に集中3.6、(6)授業が整理され段階的に進められている4.0、(7)知的な興味・関心を抱かせる4.0、(8)評価基準が明確4.3、(9)内容を理解できている4.0、(10)話し方が明瞭4.0、(11)資料や教材が用意されている4.5、(12)わかりやすく工夫されている4.2、(13)適切な時間配分4.5、(14)適切な注意指導4.4、(15)質問相談に適切に対応4.2、(16)自主的な学習をしている4.3、(17)総合：受講して良かった4.3。</p> <p>東京成徳大学心理学研究科修士課程「発達臨床心理学」の授業に対する学生の評価結果である（いずれも5点満点）。</p> <p>(1)よく出席4.29、(2)よくノートを取る4.57、(3)疑問点は質問4.43、(4)疑問点は調査4.71、(5)積極的に取り組み4.43、(6)授業目的が明確4.71、(7)工夫された講義4.29、(8)興味が持てる4.29、(9)今後生きる知識4.14、(10)評価基準が明確4.57、(11)友人後輩に薦めたい4.00、(12)話し方が明瞭4.71、(13)熱意が感じられる4.71、(14)質問に適切に対応4.86、(15)学びたい専門知識5.00、(16)説得力ある専門知識5.00、(17)十分な準備4.71、(18)受講して満足4.29、(19)今後役に立つ4.14。</p>
<p>4 実務の経験を有する者についての特記事項</p>		
<p>5 その他</p>		

①文部省教職課程認定委員会の教員審査	平成11年12月	筑波大学が教職課程の認定を受ける際、教育の基礎理論に関する科目の「教育心理学」（必要事項：幼児、児童および生徒の心身の発達および学習の過程）の専任教員（教授）として認定を受ける。
②文部省大学設置・学校法人審議会の教員審査	平成12年8月、11月	筑波大学大学院人間総合科学研究科ヒューマン・ケア科学専攻博士課程「研究指導」担当教授として以下の授業科目に（D○合）の認定を受ける。①発達臨床心理学特講、②発達臨床心理学演習、③発達臨床の実際Ⅰ、④発達臨床の実際Ⅱ、⑤臨床心理面接特論、⑥臨床心理査定演習Ⅰ、⑦ヒューマン・ケア科学基礎論。
③文部科学省教職課程認定委員会の教員審査	平成18年12月	筑波大学の学群（部）改組にともなう教職課程認定のなかで、「教育心理学」（必要事項：幼児、児童および生徒の心身の発達および学習の過程（障害のある幼児、児童および生徒の心身の発達および学習の過程を含む））の専任教員（教授）として認定を受ける。
④文部科学省大学設置・学校法人審議会専門委員	平成15年4月～19年3月	「教育学・保育分野」分野の専門委員として大学（短大・大学院を含む）の設置ならびに教員審査を務める。平成17年度、19年度、同分野の主査。
⑤文部科学省大学設置・学校法人審議会委員	平成17年4月～19年3月	大学設置分科会の委員として。
⑥文部科学省大学設置・学校法人審議会専門職大学院特別審査会委員	平成17年4月～18年3月	教育(教職)分野の専門委員として。
⑦文部科学省大学設置・学校法人審議会専門職大学院専門委員会委員	平成17年4月～18年3月	専門委員として、専門職大学院の設置ならびに教員審査に従事。
⑨文部科学省大学教育の国際化推進プログラム（先端的国際連携支援）選考委員会委員	平成19年4月～20年3月	先端的国際連携プロジェクトの採択の選考に従事。
⑩文部科学省「大学教育の国際化加速プログラム（海外先進教育研究実践支援）選定委員会委員	平成20年4月～21年3月	海外先進教育研究実践プロジェクトの採択の選考に従事。
⑪大学評価・学位授与機構「国立大学教育研究評価委員会」専門委員	平成20年2月～21年3月	人間科学系学部・大学院の教育・研究の評価に従事。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1. 資格、免許		
2. 特許		
3. 実務の経験を有する者についての特記事項		
4. その他		

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又は 発表学会等の名称	概要
(著書) 1) 図説発達心理学 (再掲)	共著	昭和52年5月	福村出版	共著者：高野清純・横島 章・新井邦二郎・高橋道子。Ⅱ部「児童の発達」(71-133頁)を執筆。体と運動の発達、認知の発達、児童と学習、対人関係の発達、児童文化、児童期における適応について図説した。
2) 単位の発達の心理学的研究	単著	昭和59年1月	風間書房	筑波大学に提出した博士論文「幼児・児童における長さの単位の概念の発達とその教育」を本として公刊したものである。文部省科学研究費(研究成果刊行補助金)による出版。幼児期から児童期にかけての長さの単位の概念の調査や実験を12本実施し、そのデータを基にして、幼児・児童期の数量教育のカリキュラムのあり方を論じた。272頁
3) 図で読む心理学・学習 (再掲)	共著	平成3年5月	福村出版	新井邦二郎編著。共著者は新井邦二郎ほか、13名。幼児・児童・青年期における学習を理解するために、学習理論から、教授・学習、教育評価、障害児の学習など、幅広い内容を扱い、なるべく図や表をもって説明を行った。2章「教室の行動の問題ー学習と障害」(23-30頁)と3章「やる気を起こさせるー動機づけ」(31-48頁)を執筆。
4) 教室の動機づけの理論と実践	共著	平成7年5月	金子書房	新井邦二郎編著。共著者は、新井邦二郎のほか12名。1章「教室の動機づけの新しい流れ」(7-20頁)、2章「教室の動機づけの計画化」(21-33頁)を執筆。小学校・中学校・高校の学校現場の問題に即して、教室の動機づけの問題について、

5) よくわかる発達と学習	共著	平成8年4月	福村出版	<p>その授業の組立て方や教師-生徒関係、学習意欲に問題を持つ子どもの問題などの理解や指導についての最新の理論と多くの実践例を示した。</p> <p>共著者：杉原一昭・<u>新井邦二郎</u>・大川一郎・藤生英行・濱口佳和・笠井 仁。1章「発達するということ」(7-30頁)、4章「学ぶということ」(67-90頁)を執筆。乳幼児・児童・青年期の子どもを対象にして、その学習や教育の過程や方法の問題、心の成長過程、特に各年齢時期における発達課題の問題、さらには障害児の発達と学習などを取り上げ、論じた。</p>
6) モノセクシュアル時代の父親学	共著	平成9年2月	福村出版	<p>高野清純・<u>新井邦二郎</u>編著：共著者は<u>新井邦二郎</u>ほか4名。6章「これからの父親学一次世代の家庭を見すえて」(156-189頁)を執筆。現代の男女間の境界が明確でなくなってきた時代(モノセクシュアル時代)における子育ての仕方の変化や子どもの発達過程の新たな特徴、父親の役割が変化していくなかで子どもの健全な発達を援助していく新しい父親論などを取り上げ、論じた。</p>
7) 図でわかる発達心理学(再掲)	共著	平成9年4月	福村出版	<p><u>新井邦二郎</u>編著：共著者、<u>新井邦二郎</u>・佐々木晃ほか10名。1章「発達課題」(9-22頁)、2章「遺伝と環境」(23-34頁)、7章「自己コントロールの発達」(83-92頁)、11章「知的機能の発達」(131-140頁)を執筆。最近の子どもの発達の諸問題と関連させ、現代社会における乳幼児・児童・青年の発達について、各年齢段階における発達課題や発達の遅れやゆがみの問題、特に成長後のさまざまな問題と結びつく自己コントロールの形成の問題を取り上げ、論じた。</p>

8) 図でわかる学習と発達の心理学 (再掲)	共著	平成 12 年 1 月	福村出版	新井邦二郎編著：共著者、 <u>新井邦二郎</u> ・川村茂雄ほか 13 名。2 章「学習の原理と諸相」(21-32 頁)、9 章「発達課題」(107-122 頁) の 2 章を執筆。幼児・児童・青年期の子どもの学習や発達の問題について、特に学校で教師が学習指導や生徒指導、カウンセリングなどを行うときに必要となるような知識や考え方を中心に論じた
9) 発達臨床心理学の最前線	共著	平成 13 年 3 月	教育出版	杉原一昭監修、 <u>新井邦二郎</u> ・桜井茂男・大川一郎編集：共著者は、新井ほか、30 名。4 章「子どもの自己決定の発達臨床心理学的意味」(128-136 頁) を執筆。現代の少子化時代において親の保護が行き届くなかで幼児、児童、青年期における自己決定経験がどのくらい存在しているのかの実態調査をもとにして、児童期までの自己決定経験が思春期の第 2 反抗期と一緒に現れることがある親への必要以上の「憎しみと反抗」(家庭内暴力や拒食症等) の発生を予防することになることを論じた。
10) 入門者のためのスクールカウンセリングの進め方	共著	平成 14 年 2 月	福村出版	高野清純・田上不二夫編集。共著者は <u>新井邦二郎</u> ほか、13 名。11 章「援助者としての能力を高めるためには」(173-185 頁) を執筆。カウンセラーに必要な人間性やその能力の高め方の方法について論じた。
11) 教育心理学 (再掲)	共著	平成 14 年 11 月	学芸図書	佐藤泰正・海保博之・ <u>新井邦二郎</u> 編集。共著者は天貝由美子ほか 13 名。幼児・児童・生徒の発達や学習、障害児・生徒の発達と学習、問題を持つ児童・生徒への臨床心理学的なアプローチなどを取り上げ、解説を行った。204 頁
12) 教育カウンセラー標準テキスト (初級) (再掲)	共著	平成 16 年 5 月	図書文化社	日本教育カウンセラー協会編。共著者は新井邦二郎ほか 20 名。「発達の理論」25-34 頁)。教育カウンセリングの視点に立って乳児

<p>13) 教育心理学—学校での 子どもの成長をめざして (再掲)</p>	<p>共著</p>	<p>平成 21 年 1 月</p>	<p>培風館</p>	<p>期から青年期までの発達の課題と各発達段階での危機について論じた。</p> <p>共著者：新井邦二郎・濱口佳和・佐藤純。1章「教育心理学総論」(1-8頁)，2章「発達課題と教育」(9-34頁)，7章「学校カウンセリング」(167-202頁)，9章「教育評価」(237-258頁)を執筆。教育心理学の成り立ちと発展の経過を辿りつつ、子どもの発達に応じた教育のあり方や学校における子どもの問題への対応のあり方、さらに子どもの学習や進歩の評価のあり方について論じた。</p>
<p>14) 新版教育カウンセラー 標準テキスト(初級)(再掲)</p>	<p>共著</p>	<p>平成 25 年 8 月</p>	<p>図書文化社</p>	<p>日本教育カウンセラー協会編。共著者は新井邦二郎ほか 24 名。3章「発達の理論」(28-37頁)担当。教育カウンセリングのための発達理論を気質から始まり、青年期の同一性に確立に至るまで、どのような過程と段階を経ていくのかについて論じた。</p>
<p>15) 新版教育カウンセラー 標準テキスト(中級)(再掲)</p>	<p>共著</p>	<p>平成 26 年 4 月</p>	<p>図書文化社</p>	<p>日本教育カウンセラー協会編。共著者は新井邦二郎ほか 27 名。第 1 章「生涯発達理論」(8-16頁)。教育カウンセリングのための発達理論を、社会化と個性化の視点から誕生から死に至るまでの生涯にわたり、どのような過程と段階を経ていくのかについて論じた。</p>
<p>(学術論文) 1) 数の発達と長さの判断の 関係</p>	<p>単著</p>	<p>昭和 48 年 6 月</p>	<p>教育心理学研究 Vol.21, No. 2. 34-42 頁</p>	<p>幼児から児童にかけての数の発達と長さの判断との関係を実験的に解明したもので、数の発達は長さの保存の判断に対してポジティブな影響を与えているが、単位を用いて長さの判断にはネガティブな効果を持つことを明らかにし、幼児から児童にかけての算数の学習において分離だけでなく連続量の学習の必要性を指摘した。日本教育心理学会城戸奨励賞の受賞論文。</p>

2) 知的行為の多段階形成理論	単著	昭和48年9月	教育心理学研究 Vol.21、No.3. 56-61 頁	ガリペリンの提案した具体的な物質的な行為から知的な内的行為へと進む「多段階形成理論」について、その理論的な背景や教育への具体的な適用例を提示し、学習や知的に遅れている子どもの学習支援の観点から、当該理論の持つ実践上の問題点を指摘した。
3) 具体－抽象度の異なる視覚的呈示場面における学習効果	単著	昭和49年3月	教育心理学研究 Vol.22、No.1. 45-49 頁	小学生を対象にしてピアジェの包摂関係の課題を使用し、実物、絵、幾何図、言葉など、一連の具体－抽象度の異なるレベルの呈示をして課題解決や学習の効果を実験的に解明した。その結果、教材の本質的な内容を明確に示すような適度の抽象度の表示の場合、もっとも効果的であるなどを見出し、学習や知的に遅れている子どもの学習支援の観点から、教材の説明をもっとも効果的にするイラストレーションのポイントを指摘した。
4) 長さ、重さ、液量における単位の同一性概念	単著	昭和50年3月	教育心理学研究 Vol.23、No.1. 1-9 頁	幼児から児童期にかけての単位の概念の成立過程を解明するために、長さ、重さ、液量の3種類の領域の単位の同一性概念の成立過程を実験的に調べた。その結果、ピアジェが保存の理解で見出したデカラージュが見られ、まず長さの単位の同一性が獲得され、次に重さ、そして液量の同一性が獲得されることを見出した。
5) 行動変容の立場からの学級経営に関する研究の現状と展望	共著	昭和51年6月	教育心理学年報 No.15. 107-121 頁	共著者、高野清純、 <u>新井邦二郎</u> ・高橋道子・勝倉孝治・川島一夫ほか2名。学校内や教室内の子どもの問題行動の治療の考え方と手続きについて、認知行動療法的な視点から検討したもので、担当部分では教室内で用いる教師の「賞賛と否定的な注意」の役割と問題点を解明した。こんこちの「学級崩壊」の予防と対策につながるものである。担当頁 108-109.

6) 幼児の長さの単位の概念の学習	単著	昭和53年9月	教育心理学研究 Vol.26、No.3. 45-50 頁	幼児を対象にして、長さの単位概念を教える教授方法として、模倣的学習に立つ方法と説明的学習に立つ方法、発見的学習に立つ方法を考案し実験した。その結果、模倣的学習が説明的学習や発見的学習おとくらべ、もっとも効果のあることなどを明らかにした。
7) 発達心理学からみた幼稚園教育の問題点	単著	昭和63年9月	学校教育研究 No. 3. 46-55 頁	幼稚園教育のさまざまな実態を把握・調査し、その上で近年の幼稚園で増大している、「外から見える形」に終始する教育の問題点を、幼児期の発達課題の観点から解明し、指摘した。
8) 大学の授業と幼稚園教育実習に関する研究	共著	平成元年2月	教科教育学研究 No. 7. 231-251 頁	共著者：林信二郎・新井邦二郎・志村洋子。大学の授業と教育実習との関係を学生がどのようにとらえているのかを調査し、そこで得られたデータに基づいて、教育実習につながる大学の授業のあり方のポイントを提案した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)
9) 乳幼児に関する発達心理学的研究の最近の動向と今後の課題	単著	平成元年3月	教育心理学年報 No.28. 51-60 頁	乳幼児を対象とした研究が盛んに行なわれているが、ここ5年間の、主にわが国の研究をレビューし、それらの研究に欠けている点として、乳幼児を取り巻く環境との関連や研究同士の相互の関係づけを意識した研究の必要性を指摘した。
10) 保育者の個性理解に関する研究	共著	平成2年12月	保育学年報 1990年版 49-58 頁	共著者：新井邦二郎・林信二郎・志村洋子。保育者が個性概念をどのように捉えているのかを、SD法を用いて、一般教諭と管理職教諭、ならびに保育を学んでいる学生の3者の比較を行なった。因子分析の結果、学生、一般教諭、管理職教諭の方向の順に、個性をネガティブに捉えていく傾向が大きくなっていくこと

<p>11) 児童の社会的情報処理と行動との関連についての研究—仲間による挑発場面について—</p>	<p>共著</p>	<p>平成4年2月</p>	<p>筑波大学心理学研究 No. 14. 107—119 頁</p>	<p>を見出した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p> <p>共著者：濱口佳和・新井邦二郎。仲間による挑発場面を仮想的に作成し、その挑発を児童がどのように認知するか(敵意的に見るか、偶然的なものに見るのか)によって、攻撃行動がどのように影響を受けるのかを実験的に検討した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>12) Recent trends of educational psychology in Japan</p>	<p>共著</p>	<p>平成6年3月</p>	<p>The Annual Reports of Educational Psychology in Japan Vol.33. Pp. 213—226</p>	<p>共著者：Kunijiro Arai, Hideyuki Fujiu . 最近の日本の教育心理学の動向を英文で海外に発信するという目的のもとに書かれたもので、新しい教育心理学研究の傾向として、学校のリストラクチャリング、中高年者の自己実現、すべての年齢者の身体・精神の健康問題を取りあげ、これからの教育心理学研究における臨床的視点の重要性を指摘した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>13) クラスの心理的環境の下位構造に関する予備的研究</p>	<p>共著</p>	<p>平成6年6月</p>	<p>科学教育研究 Vol.18, No.2. 50—57 頁</p>	<p>共著者：谷島弘仁・新井邦二郎・馬場道夫 . 学習に関するクラスの心理的環境について、その下位の構造に着目して検討した。実際に、小学生高学年生を対象にして得られたデータを因子分析した結果、4つの下位構造の存在を明らかにした。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>14) 日本と韓国の幼児の主体性の発達—『幼児の主体性の教師評定尺度』を通して</p>	<p>共著</p>	<p>平成6年12月</p>	<p>保育学研究 32 巻. 126—135 頁</p>	<p>共著者：新井邦二郎・金英子・宮腰養・後藤かつ。4歳、5歳児の主体性の教師評価(自分のイメージを持って行動をしているのか、自分のイメージと他者のイメージとの調整を図ろうとしている</p>

<p>15) 中学生におけるクラスの動機づけ構造の認知に関する探索的検討</p>	<p>共著</p>	<p>平成7年3月</p>	<p>教育心理学研究 43巻,1号. 74-84頁</p>	<p>のかなどの評価)を日本と韓国において実施し、韓国の幼児の主体性が日本の子どもよりも早くから見られることなどを見出した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p> <p>共著者：谷島弘仁・<u>新井邦二郎</u>。中学生のクラスに注目し、学習に対してクラスがどのような動機づけの傾向を持っているかを検討した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>16) 社会的スキルと交通法規・交通道德</p>	<p>単著</p>	<p>平成7年5月</p>	<p>国際交通安全学会 『IATSS Review』 Vol.21、No.1. 16-23頁</p>	<p>「交通ルール・マナーを守ろう」という交通安全教育が以前から行なわれているが、それがほとんど効果をあげていない現状において、心理学的視点から交通の社会的スキルの教育を提唱した。交通参加者が、最低限の社会的スキルを学校や家庭、地域で身につけることにより、交通法規・交通道德のみの教育よりも効果的になることを強調した。</p>
<p>17) 小学生の自己決定経験の調査</p>	<p>単著</p>	<p>平成8年3月</p>	<p>筑波大学心理学研究 No. 18. 75-95頁</p>	<p>子どもの生きる意欲の理解を目指して、小学1-6年間での児童および保護者を対象に、「朝の起床」から「家での学習」、「小遣いの使い方」など、生活行動や学習行動において子どもがどの程度の自己決定経験をもっているのかを調査した。その結果、多くの行動において自己決定経験が少ないこと、特に男子が女子よりもその傾向が有意に少ないことなどを見出した。</p>
<p>18)The relationship between motives for science,perceived ontrol,achievement anxiety,and self-regulation in junior high school students.</p>	<p>共著</p>	<p>平成8年3月</p>	<p>Psychologia,39 Pp. 298-254</p>	<p>共著者：Yajima,H.,Sato,J.,& <u>Arai,K.</u>。中学生を対象に、クラスの動機づけの認知傾向と自己コントロール感、学業成績の認知、不安感、自己調整との関係を検討したところ、クラスの動機づけを高く認知することが、自己コントロール感や</p>

<p>19) クラスの動機づけ構造が中学生の教科の能力認知、自己調整学習方略および達成不安に及ぼす影響</p>	<p>共著</p>	<p>平成8年9月</p>	<p>教育心理学研究 44巻,3号. 84-91頁</p>	<p>学業成績の認知、自己調整にプラスに影響し、不安感にマイナスに影響することを見出した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p> <p>共著者：谷島弘仁・新井邦二郎。個々の子どもの動機づけでなくクラス(学級)の動機づけに視点を変えて、中学生を対象に調査を実施し、クラスの動機づけの特徴そのクラスの生徒の能力認知や自己調整学習方略および達成不安との関連をパス解析し、それぞれの関係において有意な関係を見出した。この結果をもとにして、クラス単位の動機づけの存在に注目し、それを学級経営や予防的教育相談などに活用する必要性を指摘した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>20) わが国の子どもの交通安全教育の問題点</p>	<p>単著</p>	<p>平成9年1月</p>	<p>国際交通安全学会 『IATSS Review』 Vol.22、No.3. 16-24頁</p>	<p>明治以来、日本の交通安全教育が一貫して持っている傾向を分析し、それらが現代社会に適応していないことを触れ、特に官庁や警察、学校や自治体で行なわれている交通安全教育を評価していく重要性と方法を提示した。</p>
<p>21) 中学・高校生の自己決定経験の調査</p>	<p>単著</p>	<p>平成9年3月</p>	<p>筑波大学心理学研究 No. 19. 7-19頁</p>	<p>中学生・高校生の生きる意欲の理解をめざし、中学1-3年、高校1-3年生を対象に、生活行動や学習活動においてどの程度の自己決定経験をもっているのかを調査した。その結果、多くの種類の行動において自己決定経験が少ないこと、特に男子が女子よりもその傾向が有意に少ないことなどを見出した。</p>
<p>22) 感情と目標が児童の社会的行動の選択に及ぼす影響</p>	<p>共著</p>	<p>平成9年9月</p>	<p>教育心理学研究 43巻,3号. 61-69頁</p>	<p>共著者：松尾直博・新井邦二郎。葛藤をひき起こす社会的場面を用いて、小学4、5、6年生を対象に、調査を実施し、そ</p>

<p>23) 自己決定の発達と学習意欲の発達との関係</p>	<p>単著</p>	<p>平成10年3月</p>	<p>筑波大学心理学研究 No. 20. 99-105 頁</p>	<p>の場面で引き出された感情と目標が、「仲良くする」、「攻撃する」、「引っ込み思案になる」などの社会的行動の発生に影響することなどを見出した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p> <p>小学校高学年児, 中学生, 高校生, 大学生を対象に調査を実施し, 自己決定の水準と学習意欲の自律度の発達を確認した後, 自己決定の水準の高低と学習意欲の自律度の発達の高低とが対応関係にあることを見出し, 自分の生活や人生を自己決定する力をつけていくことが自律的な学習に対して積極的な関係をもつことを示した。</p>
<p>24) 児童の対人不安傾向と公的自意識、対人的自己効力感との関係</p>	<p>共著</p>	<p>平成10年3月</p>	<p>教育心理学研究 46 巻,1 号. 21-30 頁</p>	<p>共著者: 松尾直博・新井邦二郎。友達と遊べない子ども・遊ぼうとしない子どもの理解のために, 対人不安感を測定する尺度を小学4, 5, 6年生を対象に作成した。対人不安が高い子どもでも, 公的自意識が高くなく, 一定の対人的自己効力感を持っていれば, 友達関係を維持することができることを見出された。この結果をもとに, 友だちを避ける子どもの臨床的な介入のための配慮点を指摘した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>25) ネガティブな感情表出の制御と友人関係の満足感および精神的健康との関係</p>	<p>共著</p>	<p>平成10年10月</p>	<p>教育心理学研究 46 巻, 4 号. 432-441 頁</p>	<p>共著者: 崔京姫・新井邦二郎。まず, 友人に対し怒りや不安, 失望などのネガティブな感情の表出をどの程度制御するか の尺度を中学生・高校生を対象に作成した。その制御の程度と関係の満足感および自尊感情, 抑うつ傾向などの精がそれらにマイナスの関係をもつこと, および男女差がみられることが明らかになった。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>

26) 子どもの自己決定の発達と社会化・個性化志向性との関係	単著	平成11年3月	筑波大学心理学研究 No. 21. 81-88 頁	小学生, 中学生, 高校生, 大学生を対象に, 自己決定意識の発達と社会化・個性化志向性との関係を調査し, 小学生から高校生までは, 自己決定は個性化志向性よりも社会化志向性により強い関係がみられたが, 大学生においては自己決定は社会化志向性と負の関係を示すことなどが見出され, 自己決定の発達の意味が発達段階によって異なることが示唆された。
27) 新版感情表出の制御尺度の作成	共著	平成11年3月	筑波大学心理学研究 No. 21. 89-97 頁	共著者: 崔京姫・新井邦二郎。感情の表出をどのように調節し制御するのかを測定するために, 大学生を対象にして尺度作成を行った。その結果, 信頼性, 妥当性のある尺度を構成することができた。 (執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)
28) 子どもの自己決定と領域別社会的ルールへの発達	共著	平成11年3月	筑波大学心理学研究 No. 21. 107-113 頁	共著者: 松尾直博・新井邦二郎。小学生, 中学生, 高校生を対象に, 自己決定意識の発達と道徳・慣習・個人の3領域のルール意識との関係を調査し, 自己決定意識の高い者が道徳・慣習・個人の3領域のルールの区別において高い得点を示し, 自己決定がルール意識の発達と関係を有することを示した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)
29) 児童・生徒の自己決定意識尺度の作成	共著	平成12年3月	筑波大学心理学研究 No. 22. 151-160 頁	共著者: 新井邦二郎・佐藤純。小学生・中学生を対象に, 自己決定意識尺度の項目の作成とその尺度の信頼性と妥当性の検討を行った。その結果, 自己決定願望, 他者決定を好まない傾向, 自己決定の不安の少なさ, 自己決定のマイナス効果の少なさ, 自己決定効力感の5つの下位尺度が得られ, 各下位尺度および全体尺度とも, 信頼性と妥当性が見られた。(執筆

30) 感情表出の制御と親和動機及びシャイネスの関連について	共著	平成12年3月	筑波大学心理学研究 No. 22. 161-166 頁	<p>担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p> <p>共著者：崔京姫・<u>新井邦二郎</u>。大学生を対象に、自分の感情表出をどのように制御（レギュレーション）するのかについて、他人との親しみの願望（親和動機）と恥ずかしがり（シャイネス）の程度の関連から検討を行い、親和動機やシャイネスの程度によって、感情表出の制御の仕方が異なることを見出した。（執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない）</p>
31) 嘔吐への不安を訴える児童の母親に対する援助過程	共著	平成12年3月	発達臨床心理学研究 Vol.11. 21-26 頁	<p>共著者：馬場康宏・<u>新井邦二郎</u>。幼児期より吐きやすく、その不安から母親と一緒にでないと登校できない小学生男子について、4ヶ月の15回にわたる母親面接を行った結果、母親が男子の行動および存在を受け入れることができるようになり、男子が情緒的に安定を示してきたケースを報告し、その心理的背景を考察した。（執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない）</p>
32) 不登校状態に陥った優等生への援助過程	共著	平成13年1月	発達臨床心理学研究 Vol.12. 41-48 頁	<p>共著者：馬場康宏・<u>新井邦二郎</u>。家族の期待にそって勉強・素行とも優等生の中学生が、不登校になり、両親との関係を本人が見直し、自分なりの人生の構成を行なうよう心理的な援助を行なうなかで、不登校も改善していったケースを報告した。（執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない）</p>
33) 中学生の攻撃行動	共著	平成13年1月	発達臨床心理学研究 Vol.12. 93-98 頁	<p>共著者：桜井良子・佐野勝徳・<u>新井邦二郎</u>。中学生の攻撃行動を、学校環境への不適応との関係から調査し、学校や教師、クラスの友だちに対する不満やスト</p>

<p>34) 不登校（不登園）傾向を示す児童と家族への援助過程</p>	<p>共著</p>	<p>平成13年12月</p>	<p>発達臨床心理学研究 Vol.13. 15-22頁</p>	<p>レスが大きいほど、攻撃行動も高くなることを見出した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p> <p>共著者：市原学・永作稔・<u>新井邦二郎</u>。幼稚園への欠席、母親への暴力、自宅へのひきこもりを示す5歳児の子どもに対する遊戯療法と両親へのカウンセリングの経過を報告したもの。両親が、子どもの心理に対する理解が深まるなかで、上記の症状の改善が見られた。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>35) 林間学校に不安を示した不登校生徒への援助過程</p>	<p>共著</p>	<p>平成13年12月</p>	<p>発達臨床心理学研究 Vol.13. 31-38頁</p>	<p>共著者：馬場康宏・<u>新井邦二郎</u>。春の新学期から不登校状態になった中学生を対象に面接を重ねるなかで、夏の林間学校に強い不安を抱いて、その予防線として不登校を続けていることがわかり、林間学校そのものへの恐怖を取り除く心理的な援助を続ける過程で不登校が改善していったケースを報告。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>36) 高校生用進路決定自己効力感尺度作成の試み</p>	<p>共著</p>	<p>平成13年12月</p>	<p>発達臨床心理学研究 Vol.13. 69-76頁</p>	<p>共著者：永作稔・<u>新井邦二郎</u>。高校生が自分の進学先を決定する際に、どのようなことを考えて決めたのかについて、特に自己効力感の観点から、どの分野の効力感を、どの程度もって決定したのかを測定できる尺度を作成した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>37) 交通安全教育の評価</p>	<p>単著</p>	<p>平成13年12月</p>	<p>国際交通安全学会 『IATSS Review』 Vol. 27, No.1. 54-61頁</p>	<p>交通安全教育の種類や形態を整理するなかで交通安全教育の体系化を試みて、それを基にして、個人の受けてきた交通安全教育の質的な面を評価するとともに、交通安全教育の目標（知識・技能の獲得、</p>

<p>38) Is participation in an English language immersion program detrimental to a student's knowledge of Japanese vocabulary?</p>	<p>共著</p>	<p>平成 14 年 3 月</p>	<p>筑波大学心理学研究 24 号. 199-202 頁</p>	<p>矢緯度やマナーの向上、経験の無いことの体験の3つの目標) にそった評価方法の提案を行なった。</p> <p>共著者： Downs Simon & <u>Arai Kunihiro</u>。日本の普通の授業において英語イマージョン教育を行なうことが、日本語の語彙に対してマイナスの影響が現れるかどうかを検討するために、イマージョン教育を行なっている学校の小学生と実施していない学校の生徒の語彙成績を比較したところ、むしろ英語イマージョン教育を行なっている子どものほうが、成績が良かったことを見出した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>39) 児童・生徒用妬み測定尺度の作成</p>	<p>共著</p>	<p>平成 14 年 3 月</p>	<p>筑波大学心理学研究 24 号. 219-226 頁</p>	<p>共著者：澤田匡人・<u>新井邦二郎</u>。小学生高学年生、中学生を対象に、妬み(他の人の優れたところをどのくらいうらやましく思うか)を測定する尺度を作成するために、予備調査で項目を集め、それらを実際に調査として実施したうえで、尺度としての信頼性と妥当性を確認した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>40) 幼児の「あざむき」研究の概観</p>	<p>共著</p>	<p>平成 14 年 3 月</p>	<p>筑波大学心理学研究 24 号. 227-236 頁</p>	<p>共著者：楯 誠・<u>新井邦二郎</u>。幼児が「あざむき」をどのように理解するのか、主に理解・認知面に焦点を当てた国外・国内の研究文献をレビューするとともに、「あざむき」の理解と子どもの認知全般との発達との関係についての考察を行なった。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>41) 妬みの対処方略選択に及ぼす、妬み傾向、領域</p>	<p>共著</p>	<p>平成 14 年 6 月</p>	<p>教育心理学研究 Vol.50, No.2. 246-255 頁</p>	<p>共著者：澤田匡人・<u>新井邦二郎</u>。自分が他人に妬みを抱いたときに、その不快な</p>

重要度、および獲得可能性の影響				気持ちをどのようなやり方で解消しようとするのかについて、子ども自身の妬みについての性格傾向や、妬みの元となる原因の獲得可能性や重要度の認識の違いの観点から分析し、小学生・中学生ともそれらの観点から解消の仕方に違いが見られることを見出した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)
42) 子どもの「自己決定環境」の調査	共著	平成14年12月	発達臨床心理学研究 Vol.14. 51-60 頁	共著者：新井邦二郎・澤田匡人・楯誠・市原学・櫻井良子。小学生、中学生、高校生ならびに小学生と中学生の保護者を対象に、家庭のなかで子どもの自己決定がどの程度許されているのか（許しているのか）について、調査を行い、分析を行なった。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)
43) 高校生用進路決定自己効力感尺度の作成（2）—因子的妥当性の検討—	共著	平成14年12月	発達臨床心理学研究 Vol.14. 79-84 頁	共著者：永作稔・新井邦二郎。高校生が進路決定するときの自己効力感を測定する尺度において、どのような下位尺度が設定できるのかを因子分析を通して、その妥当性を検証した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)
44) 子ども用抑うつ自己評価尺度（DSRS）の因子構造の検討と標準データの構築	共著	平成14年12月	発達臨床心理学研究 Vol.14. 85-92 頁	共著者：佐藤寛・新井邦二郎。アメリカで開発された小学生を対象とした「うつ状態」の自己評価尺度を日本の子どもに全国的に実施し因子構造を明らかにするとともに、全国的な標準的な規準を作成した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)
45) 子どもの自己決定欲求と自己決定権意識の発達	共著	平成15年3月	筑波大学心理学研究 25号. 105-112 頁	共著者：新井邦二郎・澤田匡人・楯誠・市原学・櫻井良子。小学校・中学校・高校の子どもたちを対象に、自己決定欲求と自己決定権意識を調査し、自己決定

<p>46) 子ども用抑うつ自己評価尺度 (DSRS) の因子モデルの検討</p>	<p>共著</p>	<p>平成 15 年 3 月</p>	<p>筑波大学心理学研究 25 号. 123-128 頁</p>	<p>権意識よりも自己決定欲求が先行して発達することなどを見出した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p> <p>共著者: 佐藤 寛・<u>新井邦二郎</u>。小学生の「うつ状態」を測定するために、国内外の先行研究を参考に収集した項目をまとめ新しく作成した尺度について、小学生を対象とした調査から得られたデータをもとにして因子モデルを検証した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>47) 幼児の「うそ」の認識に関する研究—信用予期に話し手の特性が与える影響の検討</p>	<p>共著</p>	<p>平成 15 年 3 月</p>	<p>筑波大学心理学研究 25 号. 129-134 頁</p>	<p>共著者: 楯 誠・<u>新井邦二郎</u>。幼児が「ウソ」に対して持つ信用予期が、話し手の特性 (よく知っている人とあまり良く知らない人) によって、異なるかどうかを検討し、仮説どおり、信用予期が話し手の特性により影響されることを見出した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>48) 自律的高校進学動機尺度作成の試み</p>	<p>共著</p>	<p>平成 15 年 9 月</p>	<p>筑波大学心理学研究 26 号. 175-182 頁</p>	<p>共著者: 永作稔・<u>新井邦二郎</u>。高校生を対象に、高校進学をどの程度自律的に決めたのかについての質問紙を構成し、その信頼性・妥当性を検証し、尺度として作成した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>49) ADHDを持つ子どもへの社会的訓練—第1報—</p>	<p>共著</p>	<p>平成 15 年 12 月</p>	<p>発達臨床心理学研究 Vol.15. 1-6 頁</p>	<p>共著者: 市原学・本多潤子・外山美樹・<u>新井邦二郎</u>。ADHDと診断される幼児に対し、筑波大学子ども相談室において約1年間にわたる社会的技能の訓練を行い、著しい向上効果を得たことを報告した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>

50) 分離に伴う不安と不登校を主訴とする小学生男児への治療過程	共著	平成15年12月	発達臨床心理学研究 Vol.15. 15-24頁	共著者：永作稔・佐藤寛・櫻井良子・佐藤純・新井邦二郎。親からの離れることに不安を持ち不登校を続ける小学生1年生の男児に対し、約1年間にわたるプレイセラピーを中心とする心理治療の結果、一定の改善が得られたことを報告した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)
51) 児童の不安症状と抑うつ症状に及ぼす学校ストレスラーの効果	共著	平成15年12月	発達臨床心理学研究 Vol.15. 37-44頁	共著者：佐藤寛・新井邦二郎。小学生を対象にして、学校の勉強や友人関係のストレスラーが不安や抑うつ症状に、どのように影響を及ぼしているのかを調査し、不安よりも抑うつ症状にそれらのストレスラーが影響していることを見出した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)
52) 学習場面における有能感と興味の発達—小学4年生から中学3年生までを対象とした横断的研究—	共著	平成16年3月	筑波大学心理学研究 27号. 43-50頁	共著者：市原学・新井邦二郎。算数・数学などの5教科の学習に対する子どもの有能感と興味を、小学4年生から中学3年生まで調査した結果、社会科などのように有能感も興味も持続していく教科と、算数・数学のようにそれらが学年の途中から低下していく教科などを見出した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)
53) 児童における素因ストレスモデルの検討：ネガティブなスキーマとストレスフルな出来事が抑うつ症状に及ぼす影響	共著	平成16年3月	筑波大学心理学研究 27号. 65-72頁	共著者：佐藤寛・新井邦二郎。小学生を対象にして、ネガティブなスキーマとストレスイベントを独立変数とし、抑うつ症状を従属変数とした調査を行い、独立変数どうしの相互作用はみられず、それらの要因がそれぞれ従属変数の抑うつ症状に影響していることを見出した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)

<p>54) Comparative study on child self-determination in Korea and Japan.</p>	<p>共著</p>	<p>平成 16 年 5 月</p>	<p>The Korean Journal of Developmental Psychology, Vol.16, No. 3. Pp. 135-154</p>	<p>共著者 : Kyunghhee Choi & <u>Kunijiro Arai</u>。韓国と日本の小学生 4, 6 年生と中学 2 年生ならびにそれらの親を対象に、自己決定に関する意識と行動の調査を実施し、その結果、子どもも親も日本のほうが韓国よりも自己決定意識が高いこと、自己決定行動は韓国も日本も女子のほうが男子よりも高いことなどを見出した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>55) 児童の体系的な推論の誤りが不安障害とうつ病性障害の症状に及ぼす影響</p>	<p>共著</p>	<p>平成 16 年 6 月</p>	<p>行動医学研究 Vol.10, No.2. 73-80 頁</p>	<p>共著者 : 佐藤寛・石川信一・<u>新井邦二郎</u>。児童用認知の誤り尺度の改訂を行なうとともに、児童の推論の誤りが不安症状とうつ症状に与える影響を調べるために、小学 4, 5, 6 年生を対象に調査を行い、構造方程式モデリングによる分析の結果、子どもの推論の誤りが不安症状とうつ症状に影響を及ぼしていることが示された。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>56) 「うそ」に対する子どもの認識に関する研究の動向</p>	<p>共著</p>	<p>平成 16 年 9 月</p>	<p>筑波大学心理学研究 28 号. 43-54 頁</p>	<p>共著者 : 楯誠・<u>新井邦二郎</u>。子どもの「うそ」に関する研究をピアジェ時代とピアジェ以降とに分け、研究の視点や研究の内容の変遷を明らかにし、さらにこのトピックスの研究の最前線を紹介した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>57) 自閉傾向を示す幼児にたいする言語指導—第 2 報—</p>	<p>共著</p>	<p>平成 16 年 12 月</p>	<p>発達臨床心理学研究 Vol.16. 1-14 頁</p>	<p>共著者 : 楯誠・高野恒子・<u>新井邦二郎</u>。自閉傾向を持ち、言語の発達に遅れの目立つ幼児に対し 2 年間にわたる言語指導を行なったが、この報告はその続報である。ラポールを形成し、遊びや課題場面で粘り強く言語指導を行なった結果、急激な変化ではなかったが、幼児の言語活動には進歩・発達を生じさせることがで</p>

<p>58) 広範性発達障害傾向の幼児に対する言語的コミュニケーション訓練過程(1)</p>	<p>共著</p>	<p>平成16年12月</p>	<p>発達臨床心理学研究 Vol.16. 27-40 頁</p>	<p>きた。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない) 共著者:永澤優子・濱口佳和・上村佳代・高坂健・新川貴紀・<u>新井邦二郎</u>。対人障害、コミュニケーション障害を持つ幼児に対し、約1年にわたる言語的コミュニケーション訓練を遊びや課題場面で行なったが、これはその前半の訓練の報告である。ラポールの形成と課題場面の導入の仕方について工夫が行なわれた。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>59) 広範性発達障害傾向の幼児に対する言語的コミュニケーション訓練過程(2)</p>	<p>共著</p>	<p>平成16年12月</p>	<p>発達臨床心理学研究 Vol.16. 41-56 頁</p>	<p>共著者:上村佳代・濱口佳和・永澤優子・高坂健・新川貴紀・<u>新井邦二郎</u>。上記研究の後半の報告である。遊びや課題場面の言語的コミュニケーション訓練を通して幼児のコミュニケーション活動が活発化し、初期とくらべ大きく進歩・成長が図られた。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>60) 中学生用数学・国語の学習方略尺度の作成</p>	<p>共著</p>	<p>平成17年3月</p>	<p>筑波大学心理学研究 29号. 99-108 頁</p>	<p>共著者:市原学・<u>新井邦二郎</u>。中学生を対象とした数学と国語(教科の代表的なもの)の学習における方略の尺度を作成した。それぞれの尺度の信頼性・妥当性が検証され、尺度として今後使用していくことが可能になった。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>61) 中学生の対人関係ピリーフ尺度作成の試み(1)</p>	<p>共著</p>	<p>平成17年3月</p>	<p>教育相談研究 第43巻. 11-17 頁</p>	<p>共著者:本田真大・石隈利紀・<u>新井邦二郎</u>。中学生を対象に対人関係(親、教師、友人)の「ピリーフ」(イラショナル・ピリーフ)を作成した。下位尺度として、関係維持と関係向上の2つを抽出し、さらに信頼性・妥当性を検証した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>

62) 中学生用友人に対する 相談行動尺度の作成	共著	平成 17 年 9 月	筑波大学心理学研究 30 号. 73-80 頁	共著者：永井智・新井邦二郎。中学生が友人に対し、自分の悩み事をどのくらい相談するのか、学習のこと、友人関係に関すること、家庭・家族のことなどに分けて質問する尺度を作成した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)
63) ソーシャル・サポート 学校生活満足度が自律的 高校進学動機に与える影 響	共著	平成 17 年 9 月	筑波大学心理学研究 30 号. 81-86 頁	共著者：永作稔・新井邦二郎。高校生を対象にして、ソーシャル・サポートを中心とする学校生活満足度が自律的高校進学動機にポジティブに影響を与えることを見い出した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)
64) 中学生の犯罪報道スト レッサーと心理的ストレ ス過程の検討	共著	平成 17 年 9 月	筑波大学心理学研究 30 号. 99-106 頁	共著者：松田侑子・永作稔・新井邦二郎。犯罪報道がテレビや新聞等によって流されているが、そのような報道情報をストレスサーと捉え、中学生がそれに対し、どのようなストレスを受けているのかを調査し、そのストレス課程を明らかにした。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)
65) 自律的高校進学動機と 学校適応・不適応に関す る短期縦断的検討	共著	平成 17 年 12 月	教育心理学研究 第 53 巻第 4 号. 516-528 頁	共著者：永作稔・新井邦二郎。高校 1 年から高校 2 年まで、3 回にわたり、高校進学動機の自律性水準と学校生活の楽しさや人間関係における満足度といった学校適応との関係を調査した。その結果、自律的に高校進学を行うことが、高校における学校適応につながるということが明らかにされた。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない) 日本教育心理学会「優秀論文賞」を受けた。
66) 中学生における悩みの 相談に関する調査	共著	平成 18 年 3 月	発達臨床心理学研究 Vol.17. 29-38 頁	共著者：永井智・新井邦二郎。中学 1 年生、2 年生、3 年生計 2075 名を対象に、①悩みの経験、②相談の経験を調査した。その主な結果、友だち付き合いのことで

67) 中学生における関係性攻撃の傾向の検討—同調行動および学校適応感の関連—	共著	平成 18 年 3 月	発達臨床心理学研究 Vol.17. 39-44 頁	<p>悩みを持つ人が最も多く見られ、また相談相手として友だちを選択した人が最も多く見られた。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p> <p>共著者：桜井良子・小浜駿・新井邦二郎。中学 1, 2, 3 年生 170 名を対象に、関係性攻撃性と同調行動、学校生活満足との関係を調査した。その結果、男女とも関係性攻撃傾向と同調行動に正の関係が見られ、学校適応感では男子では関連が見られなかったが、女子では関係性攻撃傾向と学校適応感の「侵害・不適応感」と有意傾向の正の関係が見られた。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
68) 推論の誤りが不安・抑うつ症状に及ぼす影響の発達の検討	共著	平成 18 年 3 月	発達臨床心理学研究 Vol.17. 45-52 頁	<p>共著者：佐藤寛・新井邦二郎。小学校 4, 5, 6 年生、中学 1 年、2 年、3 年生 407 名を対象に、推論の誤りの不安と抑うつ症状に対する影響を発達の的に調査した。その結果、推論の誤りは不安と抑うつ症状の予測因子であることが確認されたが、その影響の強さには小学生と中学生の間ではほとんど違いが見られなかった。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
69) 中学生の社会的スキル獲得動機の検討—学校適応間状態の差異に注目して—	共著	平成 18 年 3 月	発達臨床心理学研究 Vol.17. 53-60 頁	<p>共著者：大島由之・新井邦二郎。中学 1, 2, 3 年生 596 名を対象に、学校適応の状態の違いと社会的スキル獲得動機との関係を調査した。その結果、学校適応が悪化するほど、社会的スキル獲得動機も低下する傾向が見い出された。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
70) 一般児童における抑うつ症状の実態調査	共著	平成 18 年 3 月	児童青年精神医学とその近接領域	<p>共著者：佐藤寛・永作稔・上村佳代・石</p>

			<p>第47巻第1号. 57-68頁</p>	<p>川満佐育・本田真大・松田侑子・石川信一・坂野雄二・<u>新井邦二郎</u>。5都県の小学4-6年生、3324名を対象に、児童用抑うつ自己評価尺度(DSRS-C)を実施し、11.6%の児童がDSRS-Cの基準値を上回ることを見出した。高い割合で認められた抑うつ症状は、睡眠の問題、活動性・動機づけの低下に関する項目であった。女子が男子よりも得点が高くなっていた。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>71) 児童の強迫性障害に対する認知行動療法の適用</p>	<p>共著</p>	<p>平成18年6月</p>	<p>児童青年精神医学とその近接領域 第47巻第3号. 274-281頁</p>	<p>共著者：佐藤寛・松田侑子・<u>新井邦二郎</u>。 字を何度も書き直す、廊下や階段を何度も行ったり来たりするなど強迫症状を示す小学6年男子に暴露反応妨害法と認知的技法を併用した認知行動療法を適用した治療の結果、自己評定、親評定、治療者評定のそれぞれにおいて強迫症状の改善が認められた。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>72) 数学学習場面における動機づけモデルの検討ーメタ認知の調整効果ー</p>	<p>共著</p>	<p>平成18年6月</p>	<p>教育心理学研究 第54巻第2号. 188-198頁</p>	<p>共著者：市原学・<u>新井邦二郎</u>。 高校生を対象として数学の学習意欲と成績との関係を検討し、成績が直接に学習の動機づけに影響を与えるのではなく、学習のメタ認知方略が介在して影響を与えることを見出した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>73) 中学生への視覚提示刺激としての感情語の収集</p>	<p>共著</p>	<p>平成19年3月</p>	<p>発達臨床心理学研究 Vol. 18. 25-32頁</p>	<p>共著者：大島由之・佐藤寛・<u>新井邦二郎</u>。 中学生の抑うつや不安の認知的過程を実験的に検証するために視覚的刺激(ひらがな・漢字)の感情価(肯定的・否定的)を測定した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>74) 利益とコストに対する認知が中学生における友</p>		<p>平成19年6月</p>	<p>教育心理学研究 第55巻. 197-207頁</p>	<p>共著：永井智・<u>新井邦二郎</u>。中学生を対</p>

<p>人に対する相談行動へ与える影響の検討</p>				<p>象に調査研究を行い、友人に相談することが、どれほどの利益になり、また不利益になるのかの見積りによって、相談行動の発生の程度が異なることを見出した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>75) Differential Patterns in the Attentional Bias for Positive and Negative Emotional Information among Depress, Anxiety, and Comorbidity in Japanese Children and Adolescents</p>	<p>共著</p>	<p>平成19年6月</p>	<p>5th World Congress of Behavioral and Cognitive Therapies Poster Abstract / Friday . p.9</p>	<p>共著者: Ohshima Y, Ohta C, Sanko Y, Shitara S, Tanaka M, Yakoshi S, <u>Arai K.</u> スペインでのバルセロナで開催された学会での発表論文集(審査あり)に掲載。抑うつと不安の強弱により、肯定的感情語・否定的感情語に対する注意過程の違いを実験的に検証した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>76) 中学生における相談行動の規定因—修正版グランデッド・セオリー・アプローチによる検討</p>	<p>共著</p>	<p>平成19年12月</p>	<p>学校心理学研究 第7巻. 35-45頁</p>	<p>共著者: 永井智・<u>新井邦二郎</u>。中学生の相談行動の規定要因を探るために、面接調査を行い、その聞き取り結果をもとに修正版グランデッド・セオリー・アプローチを適用した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>77) 千葉県、神奈川県、東京都の小・中学校教師を対象とした社会的スキル教育のニーズ調査</p>	<p>共著</p>	<p>平成20年2月</p>	<p>発達臨床心理学研究 第19巻. 21-34頁</p>	<p>共著者: 藤枝静暁・<u>新井邦二郎</u>。現在、社会的スキルの不足がさまざまな問題行動の発生のきっかけがあり、教師が子どもを観察して、どのような社会的スキルを子どもが身につけると良いと理解しているのかを調査研究した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
<p>78) 相談行動の利益・コスト尺度改訂版の作成</p>	<p>共著</p>	<p>平成20年3月</p>	<p>筑波大学心理学研究 35巻. 51-57頁</p>	<p>共著者: 永井智・<u>新井邦二郎</u>。すでに開発した相談行動の利益・コスト尺度の旧版の改訂版を作成し、その信頼性・妥当性の精度を高めた。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>

79) 中学生の悩みの経験と援助要請行動が対人関係適応感に与える影響	共著	平成 21 年 6 月	カウンセリング研究 Vol.42,No.2. 176-184 頁	共著者：本田真大・石隈利紀・ <u>新井邦二郎</u> 。中学生の悩みの経験と援助要請行動(相談行動)が対人関係における適応感に与える影響を、家族、教師、友人という相談相手ごとに検討したところ、悩みをもつことが対人関係適応感を低めるが相談行動を促進し、相談行動自体は対人適応感を高めることなどが見出された。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)
80) 不適応状態にある中学生に対する学級単位の集団社会的スキル訓練の効果-ターゲット・スキルの自己評定、教師評定、仲間評定を用いた検討-	共著	平成 21 年 9 月	教育心理学研究 Vol.57,No.3. 336-348 頁	共著者：本田真大・大島由之・ <u>新井邦二郎</u> 。不適応状態にある中学生に対し、集団的社会的スキル訓練(上手な聴き方と心が温くなる言葉)を授業で行ったところ、仲間評定のスキル得点と仲間からの受容感が向上したことを見出した。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)
81) 職場の対人ストレス過程におけるワーク・エンゲイジメントの検討	共著	平成 21 年 12 月	経営行動科学 Vol.22,No.3. 223-231 頁	共著者：設楽紗英子・ <u>新井邦二郎</u> 。職場でワーク・エンゲイジメントの高い個人は他者との間に起きた問題に対し、積極的に関係改善をすることがわかったが、精神的健康や情緒的サポートとの関係が見いだされなかった。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)
82) 大学生の就職活動不安が就職活動に及ぼす影響-コーピングに注目して-	共著	平成 22 年 2 月	心理学研究 Vol.80,No.6. 512-519 頁	共著者：松田侑子・永作稔・ <u>新井邦二郎</u> 。就職活動不安が高まると、就職活動量と満足感が低下し、問題焦点型コーピングも低下していくことが示された。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)
83) 幼児を持つ母親の悩みに関する援助要請行動に影響を与える要因の検討	共著	平成 22 年 9 月	カウンセリング研究 Vol.43,No. 1. 51-60 頁	共著者：本田真大・ <u>新井邦二郎</u> 。幼児をもつ母親に対する調査を行い、子育てについての悩みの援助要請行動を促進する

84) 援助要請スキル尺度の作成	共著	平成22年 12月	学校心理学研究 第10巻第1号 33-40頁	<p>要因として、子どもと援助要請の相手との関係の認知と母親の悩みの深刻さなどが明らかにされた。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p> <p>共著者: 本田真大・<u>新井邦二郎</u>・石隈利紀。中学生を対象に調査を行い、援助要請におけるソーシャルスキル行動を測定する尺度を開発した。尺度としての信頼性、妥当性を検証した(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)。</p>
85) 公立幼稚園における特別支援園内研修の実践記録	共著	平成23年3月	川口短期大学紀要, 25号, 165-174頁	<p>共著者: 藤枝静暁・森田満理子・<u>新井邦二郎</u>。特別支援対象児および気になる子どもの最近の様子, 集団保育と個別保育場面における難しさ, その子どもと周囲の子どもとの人間関係, その子どもの親子関係などを聞き, そのコンサルテーションを行ったことを記録した(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)。</p>
86) 中学生に対する学級規模の問題解決スキル訓練の効果	共著	平成23年8月	北海道教育大学紀要(教育科学編) 第63巻第1号 33-40頁	<p>共著者: 本田真大・大島由之・<u>新井邦二郎</u>。中学生のクラスを対象に, 友だち関係のトラブルの問題解決スキルを訓練して, ストレスの低下で, その効果を確認した(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)</p>
87) 中学生の友人、教師、家族に対する被援助志向性尺度の作成	共著	平成23年10月	カウンセリング研究 Vol. 44, No. 3. 254-263頁	<p>共著者: 本田真大・<u>新井邦二郎</u>・石隈利紀。中学生を対象として調査を行い, 友人、教師、家族に対する被援助志向性の尺度の作成を行った。検証の結果, 尺度としての信頼性ならびに妥当性を得ることができた(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)。</p>
88) 公立幼稚園における特	共著	平成24年3月	川口短期大学紀要, 26号, 167-177頁	<p>共著者: 藤枝静暁・森田満理子・<u>新井邦二郎</u>。幼稚園に在籍する特別支援対象児</p>

別支援園内研修の実践記録(2)				および気になる子どもについての保護者との相談を記録した(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)。
89) 公立幼稚園における特別支援園内研修の実践記録(3)	共著	平成25年3月	川口短期大学紀要, 27号, 223-232頁	共著者: 藤枝静暁・森田満理子・新井邦二郎。幼稚園と療育施設との連携を試みた。連携の効果として、子どもが不要な混乱(パニック)に陥ることを回避できた、落ち着いて園生活を送れるようになった、子どもが生活スキルを習得できたなどがあった。保育者側の利点としては自信を持って子どもに対応できるようになった(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)。
90) 児童の友人愛着を測定する尺度の作成	共著	平成25年12月	学校心理学研究第13巻第1号 41-52頁	共著者: 八越忍・新井邦二郎。小学生を対象に友人愛着を測定する尺度を作成し、信頼性、妥当性を検討した(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)。
91) ピア・サポートトレーニングが中学生における援助行動に与える影響の効果	共著	平成25年12月	学校心理学研究第13巻第1号 65-76頁	共著者: 永井智・新井邦二郎。中学生を対象にピア・サポートトレーニングを実施して、中学生の援助行動に与える訓練効果を直後のみならず12週間後においても確認した(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)。
92) 大学生の主張性と適応について—自己表明・他者配慮と外的適応・内的適応との関係	共著	平成26年3月	東京成徳大学院心理学研究科紀要, 14号, 34-42頁	共著者: 鈴木健一郎・新井邦二郎。主張性概念を自己表明と他者配慮の2側面に分けて、それぞれと友人関係、対人的疎外感の外的適応ならびに主観的幸福感や抑うつとの内的適応との関係を検討した(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)。
93) 関係志向性・活動志向性尺度作成の試み	共著	平成26年3月	東京成徳大学院心理学研究科紀要, 14号, 26-33頁	共著者: 青木素子・新井邦二郎。関係志向性・活動志向性尺度を作成し、関係志向性・活動志向性と心理的well-beingの諸側面との関連について検討した(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)。

94) 子どもの変化、どう見るか	単著	平成26年12月	Principal, 12, 18-21 頁	現代の子どもたち精神面における変容の姿とその社会文化的な要因について考察した。
95) 感謝感受性ならびに感謝表現尺度の作成と心理的機能の研究	共著	平成27年3月	東京成徳大学臨床心理学研究, 15, 1-8 頁	共著者：倉田義大・新井邦二郎。大学生を対象に、感謝感受性尺度と感謝表現尺度を作成し、それぞれが主観的幸福感などの内的適応と人間関係などの外的適応の双方に影響することを確認した（執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない）。
96) 結婚観・子ども意識・子育て意識に影響する要因の検討	共著	平成27年3月	東京成徳大学臨床心理学研究, 15, 19-27 頁	共著者：伊藤嘉奈子・新井邦二郎。大学生を対象に、父親イメージ、母親イメージ、親族サポート（予測）、ソーシャルスキル、被援助志向性、個人化志向、共働き志向の要因が結婚観や子育て観に及ぼす影響を調べ、ソーシャルスキルと個人化志向の影響の強いことを確認した（執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない）。
97) 子ども時代の諸経験とナーチュランスの関係	共著	平成27年3月	東京成徳大学臨床心理学研究, 15, 103-110 頁	共著者：上田光浩・新井邦二郎。大学生を対象に、子ども時代の子どもの世話、高齢者の世話、けがや病人の世話、障害者の世話、虫や動物の世話、植物の世話、制作活動の直接・間接経験が現在のナーチュランスへの影響を検討した（執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない）。
98) デートDV加害・被害深刻度質問紙及びデートDV支配・被支配質問紙の作成	共著	平成27年3月	東京成徳大学臨床心理学研究, 15, 170-179 頁	共著者：松野 真・新井邦二郎。大学生を対象に、デートDV加害と被害深刻度質問紙ならびにデートDV支配・被支配質問紙を作成し、それらの関係について検討を行った。主な結果として、加害頻度の高い人ほどパートナーを自分の思い通りにコントロールする一方、パートナーに決定を任せようとする二面性が示唆された（執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない）。

99) 子どもの個性とわが ママ	単著	平成 27 年 3 月	教育と医学 3、28-35 頁	現代の子どものわがママを生物学・社 会学的視点から検討を行い、わがママが その人の個性として、どこまで許容され るのかについて論じた。
100) 公立幼稚園における 特別支援園内研修の実践 記録(4) - 3年間の活 動の振り返り-	共著	平成 27 年 3 月	埼玉学園大学臨床心理 カウンセリングセンタ ー紀要, 1 号, 14-20 頁	共著者: 藤枝静暁・森田満理子・ <u>新井邦 二郎</u> 。2011 から 2013 年における公立幼 稚園での保育カウンセラーとしての活動 を振り返り、その課題を整理した(執筆 担当部分は協議して執筆したため特定で ない)。
101) 公立幼稚園における 特別支援園内研修の実践 記録(5) - 保護者への 個別面接の振り返り-	共著	平成 27 年 3 月	埼玉学園大学紀要 人間学部編, 第 15 号, 215-222 頁	共著者: 藤枝静暁・森田満理子・ <u>新井邦 二郎</u> 。保育カウンセラーによる保護者面 接活動の内容を記録した。傾聴と受容と いう姿勢で保護者の相談を聞きつつ、ア ドバイスや支持といった能動的な対応が 良い結果につながった(執筆担当部分は 協議して執筆したため特定でない)。
102) 中学生における親の 期待の認知と外的適応の 関連	共著	平成 27 年 8 月	カウンセリング研究 47 (3)、127-136 頁	共著者: 渡部雪子・濱口佳和・ <u>新井邦二 郎</u> 。中学生を対象に、子どもたちが認 知している親の期待とその適応のあり 方との関係を検討した。主な結果とし て、親の期待の受け止め方が子どもの 適応・不適応をよく説明することが見 出された(執筆担当部分は協議して執 筆したため特定できない)。
103) いじめ被害者が加害者 へと変化しないための周 囲の対応-大学生への調 査をもとに-	共著	平成 28 年 3 月	東京成徳大学臨床心理 学研究, 16, 1-9 頁	共著者: 栗本顕・ <u>新井邦二郎</u> 。 大学生を対象に、小学校高学年と中学 生のときのいじめ被害者としての経験や 加害者としての経験を尋ねた。主な結果 として、いじめ被害者が加害者へと変化 しない周囲の対応の仕方では、話を聞い てもらう対応やいじめ再発防止的関わり 、加害者になることへの抵抗要因、被 害者の気持ちに共感し、周囲の人からの ポジティブなサポートのケアがみられ た。(執筆担当部分は協議して執筆したた

<p>104) ゆるし傾向性に影響する要因ならびに外的適応・内的適応との関連の検討</p>	<p>共著</p>	<p>平成 28 年 3 月</p>	<p>東京成徳大学臨床心理学研究, 16, 10-20 頁</p>	<p>め特定できない)。 共著者：椎名翔太・<u>新井邦二郎</u>。 大学生を対象に、ゆるし傾向性についての促進・抑制要因の特定、および外的・内的適応の影響の検討を行った。主な結果として、①他者へのゆるし傾向は、全体・男性で主観的幸福感を高めた。②自己への消極的ゆるし傾向は、全体・男性・女性で友人関係と主観的幸福感を高め、対人的疎外感とうつ状態を軽減した。③自己への積極的ゆるし傾向は、全体・男性・女性で友人関係と主観的幸福感を高め、対人的疎外感を軽減したことが示された。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)。</p>
<p>105) 青年の死別経験に対する意味の付与と死別経験後成長感</p>	<p>共著</p>	<p>平成 28 年 3 月</p>	<p>東京成徳大学臨床心理学研究, 16, 21-29 頁</p>	<p>共著者：山田健斗・<u>新井邦二郎</u>。 大学生を対象にして、死別経験に対する“意味の付与”とその経験から生じると考えられる“成長感”との関連について検討した。主な結果として、①30 項目からなる死別経験後成長感尺度が作成され、「自分自身の成長」、「人間関係の成長」、「死の悲しみからの脱却」、「生きることの再認識」、「生死の思索」の 5 因子が見出された。②死別経験に対する意味の付与尺度の下位尺度である「死別経験のポジティブな側面への焦点付け」「死別を経験した自己に対する評価」「死別の持つメッセージ性のキャッチ」はそれぞれ「死別経験後成長感」に有意な正の影響を与えていた。(執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない)。</p>
<p>106) 援助要請行動から適応間に至るプロセスモデルの構築</p>	<p>共著</p>	<p>平成 28 年 5 月</p>	<p>カウンセリング研究 48 (2)、65-74 頁</p>	<p>共著者：本田真大・<u>新井邦二郎</u>・石限利紀。</p>

107) 教育カウンセリングの理論	単著	平成 29 年 2 月	指導と評価, 2, 12-14 頁	<p>中学生を対象に、援助要請行動から適応感に至るプロセスモデルを検証した。共分散構造分析の結果、援助要請スキルが実行されたサポートと関連し、実行されたサポートがポジティブな援助評価と関連し、ポジティブな援助評価が学校生活享受感と関連することが示された（執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない）。</p> <p>教育カウンセリングを支える 12 のカウンセリング理論を挙げ、その要点を解説するとともに、やはり教育カウンセリングを支える 8 の心理学を挙げた。</p>
108) 大学生の失敗観の影響と失敗観への心理教育的	共著	平成 29 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究, 17, 1-7 頁	<p>共著者：岩佐瑞樹・新井邦二郎。</p> <p>大学生を対象にした調査研究により、失敗観、すなわち失敗経験に関するポジティブまたはネガティブな価値観が大学生の課題場面、対人関係、メンタルヘルスなどの心理面に与える影響を明らかにした。その上で失敗観の心理教育的介入プログラムを実施し、その効果を確認した（執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない）。</p>
109) 聴き方スキル・話し方スキル尺度の作成ならびに適応との関係について	共著	平成 29 年 3 月	東京成徳大学臨床心理学研究, 17, 62-70 頁	<p>共著者：石井琴子・新井邦二郎。</p> <p>大学生を対象とした調査研究により、聴く・話すというコミュニケーション・スキルのうち、訓練によって身につけやすいような行動面に焦点を当てた聴き方・話し方スキル尺度を作成した。そのうえで、この 2 つのスキルと内的・外的適応との関係について明らかにした（執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない）。</p>

<p>110) 女子大学生における親への親密感と親からの自立との関連—適応、発達仮題、親の養育態度との関係—</p>	<p>共著</p>	<p>平成30年3月</p>	<p>東京成徳大学臨床心理学研究, 18, 53—61 頁</p>	<p>共著者：本道道子、<u>新井邦二郎</u>。 女子大学生を対象とした質問紙調査の結果、親からの自立よりも、親との親密感のほうが、女子大学生の適応（抑うつ・主観的幸福感）や発達課題（アイデンティティの確立・職業的モラトリアム）に強く影響していることが見出されていた（執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない）。</p>
<p>111) 中学生における相談の回避傾向と相談意欲の諸要因</p>	<p>共著</p>	<p>平成30年3月</p>	<p>東京成徳大学臨床心理学研究, 18, 86—94 頁</p>	<p>共著者：勝又靖博、<u>新井邦二郎</u>。 中学1年～3年の男女を対象とした質問紙調査を実施し、相談行動を促進する側の要因として「相談効果の肯定的見積もり」を、相談行動を抑制・回避させる側の要因として「相談の不利益懸念」「相談スキルの欠如」「相手の負担懸念」「相談実行のコスト」「自助努力の信念」を取り上げ、それらが相談回避傾向と相談意欲にどのような影響を与えるのかを明らかにした（執筆担当部分は協議して執筆したため特定できない）。</p>